

作品ノート

ティーモナーイン

この作品は4つのパート、4つのメディアを用いて作ったものである。いつものように、最初にでき上がったのは、詩のアイデアだった。

1：ビジュアル・ポエム

制作したのは2004年。かなり以前からこうした詩を書くことを考えていた。私は絵描きでもあり、線、曲線、直線、色に慣れ親しんできた。そこから私が考えたのは線と言葉とをどのように混ぜようかということだ。

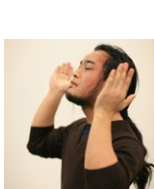
私は1971年生まれたが、私が生まれる前、1962年から軍当局はビルマに存在していた。そして生まれてからも、この詩を書いた2004年においても。さらに現在私は30歳を越えたが、軍当局は存在している。私たちはそれを嫌い、1988年には革命を起こした。次の世代もそれに続いた。それでも彼らは権力を持ち続けている。

ビルマ国民の多くが、劣悪な状況の中で暮らしており、食べることも飲むこともできない。そして人々は教育、経済、未来を忘れ去った。多くの人がどうしてよいかさえ分かっていない。とくに若者が。この国が軍の支配下になって40年以上が経った。

私自身も塞がれている。生まれる前から続く軍の支配。

キングダム・ヴォイド (空白の王国) ニャンリンテツ

『キングダム・ヴォイド (空白の王国)』は、大量殺戮後のある国家を舞台に、絶対的権力と国家の崩壊との入り組んだ関係を模索することを意図してつくられた。この作品は、国家にとっての成功と失敗、その命運を左右する、国家自体の役割と社会の構成員が持つべき責任について問いを投げかける。君主政治と幽霊たちが登場する戯曲の中で、過去と現在がもつれ合い、蛇行していく。



© Theatre of the Disturbed

ニャンリンテツ Theatre of the Disturbed 主宰、演出家、パフォーマー。ミャンマーとフランスを拠点に活動。2000年代初頭にパフォーマンスアートを製作、その後の日本の劇団「Annees Folies」にて演劇の訓練を受ける。以後、積極的に世界のパフォーマンスアートや演劇シーンに携わっている。2005年にヤンゴンに拠点を置く「Theatre of the Disturbed」を設立してからはシェイクスピア、ベケット、イヨネスコ、カフカなどの作品の翻案、演出も手がけている。

今私は30歳を越えている。この劣悪な環境は閉じられている。そのことを、どのように言葉にすることができるだろうか。詩で書いてみても、いかにも詩を書きましたというかたちにはしたくない。

この詩の中の言葉には、始まりがない。そして、終わりもない。この始まりと終わりのない詩と線とを混ぜてみた。よくある、一行終わったらまた一行というような詩にはしたくない。塞がれ、閉じた環境を作ってみた。

…たちは、そのように、つながって、話すことのある隙間ことを考えていた。私は絵描きでもあり、線、曲線、直線、色に慣れ親しんできた。そこから私が考えたのは線と言葉とをどのように混ぜようかということだ。

普通のかたちでは読ませたくない。読みたいなら、本の周りを回らなければならない。

2：テキスト・インスタレーション

プラスチックの上に詩を印刷し、インスタレーションとして展示する。プラスチックを用いる目的は、透明感が気に入ったから。書物で使われる紙は不透明だから。

私たちは飢えている。ものごとをはっきり見るのできる環境を、私は求めている。だが、現実にはそれは不可能だ。だから私は文字を使い、テキスト・インスタレーションをつくり上げた。そこに書かれた言葉のほとんどは、検閲を通ることがない。プラスチックの板に書かれた言葉は、空気の中にばらばらに止まっている。すべて透き通って。

東京公演によせてターソー

2015年10月、東京公演のターソー。写真：佐野文彦

ミャンマー伝統音楽とエレクトロミュージックをミックスし始めたのは、「何か新しいものを作り出したい!自分のスタイルを生み出し、何か新しいモノをミャンマーのオーディエンスに与えたい!」そういった想いと、「1000年以上も前からあるミャンマーの音楽を自分なりにリメイクしてみたい!」という想いからだった。そうやって作ってみたら、全然今までとは違うものができて、自分でもそれは最高だと思ったし、ミャンマーのみんなも好きになってくれると確信した。ミャンマーの音楽史上、自分が作り出したような音楽は全然なかったから、音楽シーンだけでなく社会にも影響を与えることができた。なかには伝統を壊すといって嫌味をいう人たちもいたけれど、ミャンマーの若者には浸透していった。

今回は初の東京公演。呼んでくれたフェスティバル/トーキョーには本当に感謝している。東京でプレイするためたくさん選曲したけど、大好きな日本のオーディエン

3：パフォーマンス

私たちは塞がれ、塞がれ、塞がれ……。軍政の下に生きる、その窮屈さを表現したい。詩とともにある線にしたがって、いくども周りながら、言葉を発する。そんな人生には本当に嫌気がさしている。

私たちは仏教の影響下にいる。人生とは輪廻だと仏陀は言う。循環する円のように、いつまでも終わることがない……平穏が訪れるまでは。

自由にはなりえないという状況。これは国の(政治)状況とは関係ない。仏陀の考え方、哲学について考えることと、現実の出来事はつながる。

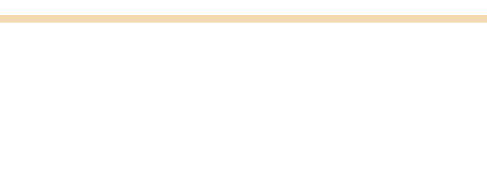
4：ショート・フィルム「are not as」

映像では、ヤンゴンの現状、閉塞感を表現した。客席に平穏は訪れない。音楽も穏やかな楽器の音色ではない。詩の内容にもとづき、自然の音を口で表現したそれは、ドイツの音楽家による実験的なものだ。

（2015年10月）



ティーモナーイン 映画監督、詩人、パフォーマー。1971年生まれ。Yangon Film SchoolとブラハのFAMU（ブラハ芸術アカデミー映像学部）で映画製作を学ぶ。2004年、初めての詩集を発表。詩をもとにしたインスタレーションやパフォーマンス、映像作品を手がける。長編ドキュメンタリー映画「ナルギス - 時間が止まった時」(2009)や長編フィクション映画デビュー作となった「The Monk」(2014)は、数々の国際映画祭で上映されており、世界的な注目を集めている。



スに自分の音楽を好きになってほしいし、今回スペシャルMIXも作った。新しく作った曲は2曲で、一つは日本のスラングを使っていて、一つは初来日の時に印象的だった発車メロディを使用しているから、電車に乗る人は好きになってくれると思う。自分の音楽を聴いてもらえるのに興奮している。みんなに会えるのがとにかく楽しみで仕方ない!



ターソー ミュージシャン、ラッパー、エレクトロ・ヒップホップ・プロデューサー。1980年生まれ。中学生の頃から音楽を始め、高校卒業後、アンダーグラウンド・ヒップホップシーンとかわるようになり、数々のグループでアルバムを発表。2001年よりロンドンにあるSAE Institueでオーディオ・エンジニアリングを学びながら、ミャンマー音楽についての研究も始める。2004年に帰国し、2006年よりミャンマーの伝統音楽をミックスしたエレクトロミュージックの創作を始め、ファーストソロアルバムをリリースする。2015年までに7枚のソロアルバムを発表。

大きな時代の変化、さまざまな想いがぶつかる場所 佐野文彦 (会場構成)

2015年10月、東京公演の会場構成。写真：佐野文彦

今年の年始にはじめてミャンマーという国に行った。全く前知識がなく、ビルマの琴琴と言われたら、ああ、そうなのかと思う程度。しかしさまざまな場所や人に触れたとき、これから発展していくとする野性的な、しかし優しさをもった人々の熱気と強さを感じた。

敬虔な仏教徒としての穏やかな民族性と良識。変わらないローカルな生活や環境、アナログな仕事と日々の営み。2011年に軍事政権から民主化し、外からの文化、物、金、仕事など、さまざまなものの流入など、ミャンマーは今まさにさまざまな顔を見せ始めている。

今回ここに集まるアーティストたちは軍事政権下に海外へ留学し、西洋的な価値観やコンテクストを学び、自分なりの表現を作ってきた。

民族、国家、政治、宗教、価値、技術、文化。鎖国状態だった国家が変化しようとする大きな時代の流れの中で彼らは何を感じ、何を思い、何を表現しているのだろうか。

海外へ出たからこそ感じる自分たちのミャンマー人としてのアイデンティティ、しかし外から見たミャンマーに対する複雑な思い。そして変化していく国家。

今回の会場構成では彼らのさまざまな想いのぶつかり合いや交錯、価値の転換などを、太い帯の交わりや天井へのつり込み、パフォーマンスによってアーティストと観客の位置が入れ替わる導線の配置などによって表現した。

表現の自由のなかった中で、表現者として生きた彼らが伝えたいものとはなんなのだろうか。時代の変化の真ただ中にいる彼らの持つ苦悩や矛盾、意思やエネルギーを彼らと同じ時間を共有しフェスティバル/トーキョーで感じてみてほしい。



さの・ふみひこ 建築家 美術家。奈良県生まれ。京都、中村外二工務店にて数寄屋大工として弟子入り。設計事務所などを経て、2011年佐野文彦studio PHENOMENONを設立。大工として、技術や素材、文化などと現場で触れ合った経験を現代の感覚と合わせ未来への新しい日本の価値観を作ることを目指してデザインやインスタレーションを手がけている。ELLE DECOR Japan Design Award 2014にてYoung Japanese Talented Designerに選出された。21_21DESIGNSIGHTにて開催された「単位展」に作品を出展するなど活躍を広げている。東南アジア企業と日本のデザイナーによる商品開発プロジェクト「グッドデザイン・メコンデザインセレクション」で、ミャンマーの企業とマッチングされた。

ミャンマー映画特集 at 東京芸術劇場 アトリエースト

2015年10月、東京公演の会場構成。写真：佐野文彦

1：「The Monk」上映会・トーク 11.18 Wed 18:00 ～

本作で脚本を担当したアウンミンが、国際交流基金アジアセンターの「アジア・文化人招へいプログラム」で来日。本編の上映に加え、監督のティーモナーインとのトークで、映画の背景や脚本執筆にいたる経緯を語る。ミャンマーの映画制作事情などを知る貴重な機会ともなる。

登壇者：ティーモナーイン、アウンミン

※ミャンマー語（日本語通訳あり）

料金：500円（予約優先）

※15分前開場・受付開始



アウンミン 脚本家、医師、映画監督。医師として医療に従事する一方、小説や現代アート書籍を執筆。2007年から映画脚本を手がけるようになり、短編ドキュメンタリー映画「The Clinic」(2012)では監督をつとめた。現在、映像専門学校Yangon Film Schoolなどで若い映像制作者の指導に力を注いでいる。2011年からブラハのFAMU（ブラハ芸術アカデミー映像学部）が主催する若手映画制作者育成プログラムMIDPOINTに参加。



2：ミャンマー映画3作品上映 11.20 Fri – 23 Mon

アートシーンのみならず、大きく情勢が変化するミャンマーのいまを感じ取ることでできる3作品を連日2本立てで上映。

料金：各日500円（予約優先）

11/20（金）	18:00『The Monk』 19:45『Beauty of Tradition』
11/21（土）	13:00『ナルギス』 14:45『Beauty of Tradition』
11/22（日）	13:00『The Monk』 14:45『Beauty of Tradition』
11/23（月・祝）	18:00『ナルギス』 19:45『The Monk』

「The Monk」

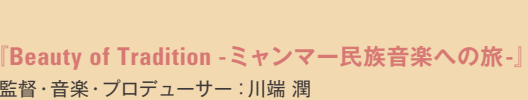
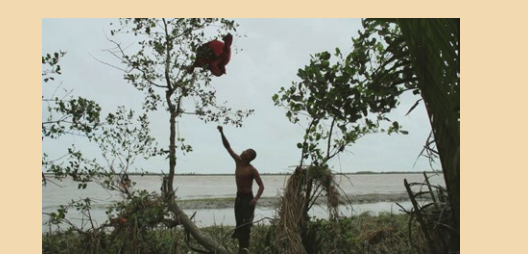
監督：ティーモナーイン 脚本：アウンミン

PRODUCED BY FAMU (Vít Janeček)

2014 / チェコ、ミャンマー / 91分 / ミャンマー語 /

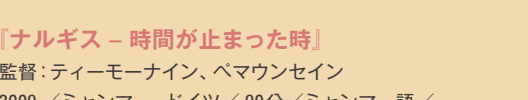
日本語、英語字幕

青年・ザーワナーは、小さな村の僧院に忍びこみ、僧侶として暮らし始める。彼は日々の生活に疑問を抱きながらも、年老いた住職に従う。やがて経済的な理由から、他の僧侶たちが僧院を離れていくなか、住職が病にかかってしまう。誰かが住職、ひいては村全体の面倒を見なければならない。ザーワナーは自身が立ち上がる決意を固めるのだった――。



「Beauty of Tradition -ミャンマー民族音楽への旅-」

監督・音楽・プロデューサー：川端 潤 2015 / 日本 / 105分 / ドキュメンタリー 製作：プロジェクトラム / エアプレーンレーベル ヤンゴン郊外の小さなスタジオに機材を持ち込み、現地の演奏家による演奏を録音、撮影したミャンマー伝統音楽のドキュメンタリー。演奏家たちの思考や日々の悩みが生々しく伝わってくるほか、僧院や祭りの様子なども見ることができる。100曲以上にのぼる収録曲は世界的にも珍しく、アーカイブとしての価値も高い作品となった。



「ナルギス - 時間が止まった時」

監督：ティーモナーイン、ベマウンセイ 2009 / ミャンマー、ドイツ / 90分 / ミャンマー語 / 日本語、英語字幕 / ドキュメンタリー © Lindsey Merrison Film 2008年にエーワディール川を襲ったサイクロン「ナルギス」。本作は、14万人もの死者を出したこの大災害直後の様子を追ったドキュメンタリーだ。政府によって撮影が禁止されているなか、サイクロン発生の7日後、若手の映画製作者たちは荒れ果てた村を訪れ、災害によりすべてを失ってしまった人々に会う――。

【お申し込み】 F/Tチケットセンター：03-5961-5209 オンライン： festival-tokyo.jp/15/program/roundabout-in-yangon/ QRコードを読み取ると直接予約フォームが開きます。→

